

オプション教材は勉強に余裕があるときに取り組んでいただく教材です。

フジ

オプション教材フジ 読解マラソン集

読解問題のもとになる長文です。読解問題をやる人は、時間のあるときに読んでおきましょう。

読解問題は、清書の週で時間があまったときにやってください。時間がないときは、やらなくていいです。

読解問題は、選択式問題の解答のコツをつかむために行います。適当に全問やるのではなく、一問か二問でもいいですから確実に正解にするつもりでやってください。

読解問題の答えを作文用紙に書く場合は、問題の番号と答えがわかるように書いてください。書き方は自由です。読解問題の用紙は返却しませんが、選んだ番号と正解は「山のたより」に表示されます。

読解マラソンの問題のページから答えを送信すると、その場で採点結果が表示されます。（この場合、作文用紙に答えを書く必要はありません）

▼作文用紙に答えを書く場合（書き方は自由です。
作文用紙の余白などに書いても結構です）

4.

解答1: 1 答えの数字を入れたあと確認ボタン、決定ボタンを押します。

5.

▼読解マラソンのページから答えを送信する場合（この場合作文用紙に答えを書く必要はありません）
<http://www.mori7.net/marason/ki.php>

1.

3.

5.

ある将軍が胸を張って言った。

「わが軍は精鋭ぞうい。敵が十二人きてもわが方の一名で撃退することができ」

ところが戦闘が始まると、あつと言うまもなく敗けてしまった。前の広言を聞いた人たちから、どうしたのだと問いつめられた。敗軍の将すこしも騒がず、

「何、敵が十三人おったんじや」

昔の中国に矛と盾を売るものがあつた。その矛をほめて、どんな堅い盾でも貫ける、と言ひ、かたや、盾については、どんな鋭い矛でも防ぐことができるをやつた。それを聞いたある人から、おまえの矛でおまえの盾をついたらどうだと問われて、答に窮した。つじつまの合わないことを矛盾というが、これはそのもことになる故事で、「韓非子」が出典である。

われわれは日常、よく、この矛と盾を売っていた人のようなことを言っている。ただ、追究する人がいなければ、面倒は起こらない。それを涼しい顔をしてやってのけているものがある。ことわざだ。

『渡る世間に鬼はない』

性善説である。ところが、いつも甘い考えをもっていると、ひどい目にあう。その用心に、

『人を見たら泥棒と思え』

がある。他人はまず疑ってかかれという性悪説の思想である。前のとは両立しないが、知らぬ顔でふたつとも認めているところがにくい。例はいくらでもある。

『女房と畳は新しいほどよい』

このことわざの「作者」がはつきりしていたら、世の女性から何と言われるか知れない。「読み人知らず」のことばは、しかし、ながく消えずに残った。ところが、他方では、

『女房と味噌は古いほどよい』

というのがあるのも忘れてはなるまい。ほめたくてもやはりあい

にく「読み人知らず」である。

『大器晩成』

『せんだんはふた葉よりかんばし』

この二つも矛盾するようで、どちらも真である。一方を立てて他をすてるというわけには行かない。

『わが仏尊し』

『隣の花は赤い』

自信家はほかのものに目をくれない。自己中心である。わが仏だけを守って懷疑することがない。ところが自信を欠く人間は、ことごとによそが気になる。うちの花はつまらないが、隣に咲いている花はすばらしいように思われる。あれがほしい。思いつめたあげく、自分のものにしてみると、さほどのことはない。幻滅。かえって、すてきたもとのうちの花が妙に魅力的に見えてくる。

『始めよければ終りよし』

『終りよければすべてよし』

これではいいたい、始めが大事なのか、終りが大事なのか、わからない。そういう人があるかもしれないが、そんなことはわからなくていいのだ。ことわざは、始めも大事、終りも大事、と言っているのである。

矛盾にしても、矛もよい、盾もよいと言っているので、矛盾にして矛盾あらず。白という語があつて黒という語があるようなものか。

（外山滋比古「ことばの四季」）



人間は嗅覚きゆうかくに関しては食肉類にかなわないけれど、味覚れいちように関しては、はるかに発達している。味を楽しむということは、高等な霊長類れいちようにすでに見られる性質である。宮崎県みやざきの幸島のサルがイモ洗あらいをする話は、あまりにも有名だが、彼らはイモを洗ってよごれを落としていただけではない。今から三十年余り前に、ある天才的なメスの子ザルが最初に考案したのは、川でイモを洗うという方法だった。おかげで彼女は、研究者に「イモ」という名をもらうはめになったが、それはさらに、海で洗うという方法に発展していった。よごれを落とすだけなら一度洗えばいいはずなのに、食べてはまた海水をつけるということを繰り返す。塩味を楽しみながら食べているのだ。(中略)

霊長類れいちようの進化の過程で、一方では嗅覚の退化が起こり、他方では味覚の進化が起こった。そして、味覚と相まって進化したのが色覚である。食肉類はほとんど色覚をもたないから、色とりどりの花はなが咲き乱れ、チョウが舞う草原にすんでいても、その美しさとは無縁むえんだろう。そういう意味では、たとえ花も木もない殺風景な場所であつても、さつき通ったイタチの臭跡しゆうせきやノウサギの糞ふんの匂い、あるいは傷きずついて仲間からはぐれた草食獣の血の匂いといった、彼らを緊張させ、心をときめかせるものに満ちあふれていれば、それこそがわれわれの感じる美しい風景に相当するものなのだろう。

では、そもそも、霊長類れいちようにおいて味覚と色覚が進化したのはなぜなのだろうか。霊長類は果実を好んで食べる。その果実というのは、熟じゆくしていないときには葉と同じ緑色をしていて、いわば葉の中に身を隠かくしている。しかし熟すにつれ、私を食べて下さいと言わんばかりに、赤、黄、紫むらさきなど葉に対してめだつ色になつてくる。その上当然のことながら、甘味も増す。つまり、霊長類の色覚は熟した果実を見つけやすいように、味覚は味を楽しむことができるように進化したのだ。

さて、固いセルロースの層そうにおおわれた、果実の種子は、そのままのみこまれると消化されずに糞ふんとともに排出される。人間は決まったトイレをもつけれども、遊動生活をしている多くの霊長類は、行く先々で糞ふんをしている。その結果、種子はあちらこちらに種まきされているのと同じことになる。しかも糞ふんという肥料つきで。実のなる植物は、ミツバチなどに受粉の大役を任せる一方で、霊長類や鳥には種まきをさせているわけである。

それに対し食肉類は、一定の巣をもっているし、たいていは糞ふんをする場所を決めている。うまくしたもので、果実は彼らに食われることがない。

さて、果実を食べながらも糞ふんをまき散らしてくれない霊長類である人間は、一定の住居を持ち、狩りをし、肉食をする。しかし同時に、味覚と色覚が発達していて、果実を好むという霊長類らしきさばもち続けている。われわれが食肉類をまねた霊長類だということは、肉や魚に味付けをして食べたり、料理の配色に気を使ったりすることによく反映はんえいされている。

異常いじように甘い物好きなホモ・サピエンスであるところの私は、デパートやスーパーのお菓子売り場に行くと、まるでお花畑にでもいるような気分になれる。それに、おめあてのお菓子を買うと、もうそれだけで幸福感でいっぱいになってしまう。こういう感情は、いったいどういふところから生まれてくるものなのか常々不思議に思っていたのだが、あるとき次のようなことに気がついた。お菓子のパッケージの色は、圧倒的に赤や黄系統が多い。青や緑のパッケージなんて、ほとんどと言つていいほどない。この赤や黄色というのは、熟した果実の色と一致するではないか！ 果実の皮をむく代わりに包装紙をめくると、中から出てくるのは、にせの果実というわけだ。

(竹内久美子「ワニはいかにして愛を語り合うか」)



私の友人に長い間アメリカに留学した男がいる。彼の話によればアメリカの生活で一番困ったことの一つは、アメリカ人の日本人に対する先入観であった。日本人はみな庭園の整理が上手だと思われるから、彼も庭園の専門家としての意見を絶えず問われた。日本人はみな水泳が上手だと思われるから、彼がプールに入ると多勢の学友が見物に来、大いにがっかりしたこともある。以上のようなアメリカ人の日本人に対する先入観の例はおびただしい。

日本に来てから、私も度々日本人の外人に対する先入観にぶつかったことがある。例えば、私のことが新聞に出るときには、必ず「碧い眼」という形容詞も出る。初めのうちは、私は何とも思わなかったが、段々疑問が高まり、万一私の眼が碧くなかったと思つて鏡で眼の色を調べた。だが、ちつとも碧くはなかった。かわいらしい先入観であるが、私の眼の碧さを楽しみにしていた人が本物を見れば、がっかりするであろう。

こんな無邪気な先入観にも困ることもある。私は西洋人としては小さくて、日本人としても大きい方ではないが、西洋人はみな巨人だという先入観があるから、私が日本式の宿に泊るときは、ほとんどいつも巨人向きのスリッパや巨人向きのどてらをくれる。そして私の貧弱な身体を見て、「やつぱりあちらのお方は体軀が立派ですな」と（皮肉ではないように）いうおばあさんもいる。赤面するほかはなかった。

以上の場合には、実物を見ても先入観の方が強いから、実物に应じて処置をとるかわりに、実在のない先入観によつて巨人のスリッパを出したり、私の「立派」な体軀を觀賞したりすることが多い。私だけなら、もちろんどんな間違つてもかまわないだろうが、もしも日本人が外国へ行つて自分らの先入観を通じて外国を見、先入観を外国の実在として報告すれば、非常に困ると思う。

一例を挙げよう。「英国は耐乏生活の国だ」という誠にありがたい先入観がある。英国へ行く日本人の多くは、ロンドンの料理屋で

まずい食物を食べて、「なるほど、イギリスの耐乏生活だな」と思うらしい。戦争直後には「耐乏生活」は事実であつたが、現在はイギリスの料理屋の食事がまずいのは、コックさんやお客に帰すべきもので、耐乏生活とは全く関係がない。戦前に比べれば今の料理屋はまじだという英国人さえいる。しかし、一般の英国民衆は日本人とちがつて、おいしいものにあまり興味を持っていない。ある戦前の調査によれば農村の人たちにとつて酢をかけたカンヅメの鮭は何よりの御馳走であつた。狭い海峡の向うにあるフランス人となんとちがうことだろう。ともあれ、耐乏生活の時代も今も英国ですばらしい御馳走になるのは決して不可能ではない。一般英国人向きの料理屋にはないだけの話である。

「英国人は紳士だ」というのは結構な先入観であり、たしかに根拠のないことではない。しかし、もしその必然の帰結として、他の外人は紳士的でないことになつたら、また困る。私自身についていえば、私はアメリカで生まれて、アメリカで育てられてから、渡英してケンブリッジ大学の教師になつた。私がケンブリッジ大学の教師だから、英国人だと日本人が思うのも無理はない。大体の場合は、しばらく話しあつてから日本人の相手は「あなたはアメリカ人とは全然ちがいますね。やはりイギリスは紳士の国です」といつてくれる。しかし、初めから私がアメリカ人だと知っている日本人は私の紳士らしさにうたれないようである。同じ私が先入観によつて、紳士と見られることもあるし、単なる毛唐と見られることもある。アメリカ人であることを隠す誘惑に負けやすい。

（ドナルド・キーン「碧い眼の太郎冠者（かじや）」



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

求めよ、さらば開かれん

ネコやイヌがドアの前でしきりに鳴くとき、ぼくらは彼らが「開けてくれ」といつているのだと理解する。ところがものをむずかしく考える人がたくさんいて、そのような理解は正しくないと教えてくれるのである。

たとえば、言語学者のレーヴエスという人は、「イヌは開けてくれ」といつて吠えるのではなく、閉じこめられているから吠えるのである」といつた。どうやら彼は、ある表現によつて未来のことを支配しようとするのは、人間においてこそ可能なのであつて、イヌやネコのような動物にはそんなことはできない、彼らにできるのは現状の報告だけである、と考えていたらしい。

これは、一時かなりの説得力をもったいいかたであつて、ぼくもそうかなと思つたことがある。

けれど、動物行動学者のローレンツはこういうことをいつている——のどのかわいたイヌが水道の蛇口に前足をかけて、ワンワン鳴いてるとき、それは人間の言語にかなり近いことをやつているのだ、と。つまりこのイヌは、疑いもなく、「早く蛇口をひねつて、水を飲ませてくれ」といつているのだ。

ドアの前でネコが鳴くのも、それとまったく同じである。とくに、彼らがトイレにいきたいとか、子どもが先に外へ出てしまつてすごく心配であるとかいう切羽つまつた情況で、ぼくらの顔をじつと見ながら、ニャア……と鳴くとき、それはレーヴエスよりローレンツのいつたことにはるかに近いだろう。

パンダの発明

ただ鳴いて「開けてくれ」とたのむだけでない。オスネコのパンダはもつとおもしろいことを発明した。

つまり彼は、人間のやつていることをつぶさに観察して、ドアを開けるとき人間たちは必ずノブにさわつていて、ということを発見したのである。ここから彼はこういう解釈をした——したがつて、ドアを開けたいときは、ドアのノブにさわればよい。

そこで彼は、部屋から外へ出たいとき、後足で立ちあがり、体と

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

前足を思いきり伸ばして、前足の先でノブにさわること 시작했다。おもしろいことに、そのときはほとんどの場合、無言である。ひよこひよこつとドアの前へ走つていつて、ひよいと立ちあがり、ノブに前足をふれるのだ。

それを見てぼくらはすぐドアを開けてやるから、パンダは自分の発明にすっかり自信をもつてしまつた。一日何回でも、開けてほしいときは必ずこれをやる。(中略)

ところが、これがほんとうにノブというものの働きを理解した上での行動であるかどうか、いささかわからなくなるような場合もある。パンダが外へ出かけていつて、庭から帰つてきたことがあつた。食堂にぼくらがいるのを見て、パンダは入れてくれという表情をした。そして、ガラス戸に手をかけて立ちあがつたのである。

三枚引きのガラス戸には、もちろんノブはない。かぎはあるが、外側からは何も見えない。その何もないところへパンダは前足をかけたのである。もちろん、ガラスの部分でなく、かぎのあるべき木枠のところにである。ただ、その高さはドアのノブと同じだつた。けれどこれも、ちやうど全身を伸ばしてとどく高さだから、たまたま一致しただけである。そのときパンダは地面から体を伸ばしたのだから、内側にかぎや引き手のあるところよりは、ずっと低い位置に足をかけたことになる。

だとすると、パンダにとっては、ノブがあつてもなくても、体を思いきり伸ばして前足でさわれば、それが開けてもらえるという認識しかなかったのかもしれない。ノブが云々という理解はなかつたのではないか？

人間以外の動物を人間的に理解すること、つまり擬人主義をきらう人は、このような解釈をよしとする。

けれど、人間だつて、たとえば横断歩道を渡るときには手を上げて、などと教わると、鉄道の踏切を渡るときも手を上げてゆく人がいるのだから、似たようなものではないだろうか。

(日高敏隆「ネコたちをめぐる世界」)



66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

恐らくまだ私が小学校へあがらない、小さい時分のことだったろう。丁度薄ら寒い曇った冬の夕方だった。私は兄と父と三人で散歩に出たことを覚えている。父の方から私等を散歩に誘うことなどはなかったから、おおかたこの時も私等が「つれてつて、つれてつて」と無理に父の後へひつついて行つたものだろう。道はどういう道を通つて行つたか、うろ覚えにさびれた淋しい裏町を通りながら、私等はいつの間にか、いろいろと見世物小屋の立ち並んだ神社の境内へ入つていた。薄気味悪いくろくろつ首や、看板を見ただけでも怖氣をふるう安達ヶ原の鬼婆など、沢山並んだ小屋がけのうちに、当時としてはかなり珍しい軍艦の射的場があり、私の兄がその前に立ち止まつてしきりと撃ちたい、撃ちたいとせがんでいた。恐らく私も同様、兄と一緒にそれを一生懸命父にねだつていたことだろう。父は私等に引つ張られて、むつつりと小屋の中へ入つて来た。暗い小屋の内部の突当りに、電気で照らされた明るい舞台があり、ここかしこで遠く近く砲火を交える小さい軍艦を二三艘描いた青い油絵の大海原を背景に、伝記仕掛の軍艦が次から次へと静々と通過していた。ガランとした小屋の中には、客が二三人いるばかりで、そのうちの射撃者はただ一人しかいなかった。撃つた弾丸が命中すると、軍艦がぱつと赤い火焰を噴いて燃えあがりながら、それでも依然として何の衝撃も受けぬらしく、その軍艦は今まで通り静々と舞台の上を過ぎて行く。私はもちろんそれが本当に燃えるものとは思わなかったが、それでもどうしてあんなに本当らしく燃えるのだろうと、子供心に驚異の眼を見張りながら、一心不乱にこの光景を眺めていた。すると、「おい？」突然父の鋭い声が頭の上に響いた。

「純一、撃つなら早く撃たないか」

私は思わず兄の顔へ眼を移した。兄はその声に怖気づいたのか急に後込みしながら、

「羞かしいからいやだあ」

と、父の背後にへばりつくように隠れてしまった。私は兄から父の顔へ眼を転じた。父の顔は幾分上氣をおびて、妙にでらでらと赤かった。

「それじゃ伸六お前うて」

そういわれた時、私も咄嗟に氣おくれがして、

「羞かしい……僕も……」

私は思わず兄と同様、父の二重外套の袖の下に隠れようとした。

「馬鹿っ」

その瞬間、私は突然恐ろしい父の怒号を耳にした。が、はつとした時には、私はすでに父の一撃を割れるように頭にくらつて、湿つた地面の上に打倒れていた。その私を、父は下駄ばきのままで踏む、蹴る、頭といわず足といわず、手に持ったステッキを滅茶苦茶に振り回して、私の全身へ打ちおろす。兄は驚愕のあまり、どうしたらよいのか解らないといったように、ただわくわくしながら、夢中

になつてこの有様を眺めていた。その場に居合せた他の人達も、皆呆つ氣にとられて茫然とこの光景を見つけていた。私はありつたけの声を振り絞つて泣き喚きながら、どういう訳か、こうしたすべてを夢現のように意識していた。また自分自身地面の上を、大声あげてのたうちながら、衆人環視の中に曝されたこうした時分の惨めな姿を、私は子供ながらに羞かしく思わずにいられなかった。しかし父の怒りがやつとおさまりかけた頃には、私はもう羞かしいも何も忘れていた。ただじつと両手で顔を蔽うたまま、思い出したように声を慄わして泣きじゃくるばかりだった。そしてその合間合間に、はなや、涙を一緒くたにブルブル咽喉の奥へ吸いこみながら、私は先へ行つてしまった父の後からやつとの思いでトボトボついて行つた。

(夏目伸六「父 夏目漱石」)



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

当時の私には、なぜこの時こんなひどいめにあったのか、その理由はまだで解らなかつた。またそれを考える意識さえも持たなかつた。しかし私と兄と二人の中で、なぜ自分だけが殊更あんなに打ったり蹴ったりされねばならなかつたのか。その点について私は子供心にも淡い不満を感じていた。そしていつの間にか、私は父のこの行為を、一切理屈ぬきの持病の結果に帰してしまつた。もちろんそれは一面においてたしかに病氣の結果には違ひなかつたが、しかしその反面に横たわる他の原因、すなわち病的な父の心を刺激したその直接の動機に関しては、私は長い間全く無関心だつた。ところがつい先頃、私は何の気なしに父の全集を拾い読みしながら、ふと次の数句に気を惹かれた。それには、

「……私の小さい子供などは非常に人の真似をする。一歳違ひの男の兄弟があるが、兄貴が何か呉れと云へば弟も何か呉れと云ふ。兄が小便がしたいと云へば弟も小便をしたいと云ふ。総て兄の云ふ通りをする。丁度其後から一歩々々ついて歩いて居る様である。恐るべく驚くべき彼は模倣者である。」

私はこれを読んだ時、ちやつともう二十数年も前に起こつたあの出来事を、どういふものか咄嗟の間に思い起こした。そして父のあの時の恐ろしい激昂の原因が、何かこの数語の中に含まれているような心地がした。恐らく父は生来の激しいオリジナルな性癖から、絶えず世間一般のあまりに多い模倣者達を——、平然と自己を偽り、他人を偽る偽善者達を——心の底から軽蔑もし憎悪もしていたに違ひない。従つて父は私の極端な模倣性を見るにつけ、その都度苦々しい不快の念を禁じ得なかつたとも考えられる。またその苦々しい不快の念はいつか病的な父の心に鬱積して、兄と同様はずかしいからと射撃を拒み、その上なおも仕種まで同じように父の袖の下に隠れようとした私に向つて、遂に猛然とその怒りを爆発させてしまつた

のではなからうか。しかも父の真実性に対する渴ききつた執着と、周囲を取巻く偽善者への忿懣は病氣の進むにつれて必ず加速度的に異様な方向へ進展して行くのが常だつた。正常における真実性への渴仰も病氣に伴う極度の警戒心にゆがめられて、いつか、瞞されはしまいかという不安に満ちた疑惑に変わり、その疑惑はたちまち、人は自分を瞞そうとしているのに違ひないという奇怪な断定にまで到達する——たしかに父の病的な心理の推移は、一面こうした経路をたどつて逐次悪化して行つたのに相違ない。しかも、兄に倣つて、父の袖の下にかくれようとした私は、不幸にして「恐るべく驚くべき模倣者」であり、自分から撃ちたい撃ちたいとせがみながら、いざ撃つと云われれば嫌だという、許すべからざる偽善者であり、さらに意識的に父を欺いた憎むべき小倅だつたのである。

(夏目伸六「父 夏目漱石」)



元気に孫の運動会を見にきて、その足で自分の妹や弟夫婦と二泊三日の旅に出て、そのまま帰ってこなかった。

父親とは九歳の時に早々死に別れたが、うかつなことに旅先の病院に駆けつけるまで母と別れるなんてことは考えてもいなかった。考える余裕がないほど母とは密着していた。

実は生まれて四十二年、母親と離れて住んだことがなかった。父が私という肩代わりを残してさっさと消えてしまったから、母ひとり子ひとり、りえとりえママの倍にあたる月日を常に一緒に生きてきた。

りえママのようなたくましさはなかった母は、夫を失った不安と心細さを娘である私にグチることで、そこから立ち直ろうとした。

「まったく神も仏もないね。ウチみたいに困っている家の互を台風に吹き飛ばさせるなんて。お前どうしたらいいと思う？」

最後は私に決断を求める。小学生の私は、あわてて飛んだ互を拾いに走り、それが使えないとわかると剥げた屋根にビニールを貼る方法を真剣に考えたものだ。

(中略)

母のような大人になりたくないと思い始めたのは、まだ中学生の頃だったと思う。

私が自分のしたいことをすると世間体が悪いと怒るのに、私がアルバイトをするとすまないねと小さくなる母が何だか悲しくていやで、私が一番不機嫌になるのは「お母さんに似ているね」といわれた時だった。

母と違う生き方をしたくて、ずっと母と闘ってきたような気がする。それでいて、離れる勇氣も放す勇氣もお互いになかった。

母に似てると誰にも言われなくなったら、母に似ていると思える部分が自分の中にたくさんあることに気がついた。私がずっと苦戦していたのは、母の影ではなく実は自分自身の影だったのかもしれないなあと思う。

私の中の認めたくない部分を、母に映してそこを嫌悪し、勝手に屈折していたのかもしれないとも思う。母がいなくなつて、いろいろなものが全部自分の中に映し出され、母への感情がシンプルな娘のものになった。

ずいぶん前に、子供は親の影と戦いながら親と逆の生き方をするか、抵抗しつつ同じ生き方をするかどちらかだというような説を読んだ覚えがある。親のいいところだけ取るといって都合のいい道はないらしい。

自分に対してはいよいよ気が重いが、写真の母には素直になった。写真は笑っている。旅先から家に連れて帰り、必死で笑っている写真を捜したのだ。これからも親の影を背負って生きていかなければならないだろう私を、せめて笑ってみてほしかったからである。

(吉永みち子「母の写真」)



僕は一度だけ塾に通ったことがある。

小学校の六年生から中学の一年生の春までの間で、場所は北海道の帯広だった。塾の名前は正式の名称があつたはずだが、今や覚えていたのは狸塾という通称のほうだけだ。(別名ぽんぽこ塾と呼ばれていた)何故その塾に通いだしたのかは忘れてしまった。多分同級生がそこへ通っていたからだろう。あの頃、僕には三人の仲間がいた。

ありもり、おのだ、まなべ、の三人である。僕を含めて四人は学校が終わると毎日自転車をとばして塾へ通うのだった。雨の日も風の日も僕は自転車ですこへ通っていた。競争するように競って、びゅんびゅん風を切って走っていたのである。

そうだ、今思い出した。僕がそこへ彼らと通うようになったのは、ちよつとした理由があつたのだ。同じクラスのあやべさんという女の子がやはり通っていたからだ。僕は彼女のことがきつと好きだったのである。どうもまだ愛とか恋とかその手の感情に鈍感な時期だったので、あれがそういう感情のものだったかどうかちよつと自信がないのだが、授業中彼女のきりりとした横顔を見るのが好きだったことは確かだった。その横顔をもつと見たくて勉強の嫌いな僕は塾通いを決心したのである。あやべさんは帯広の大きな病院の令嬢で、ゴトウクミコにまさるともおとらない美形(いや、これは信じて頂くしかないのだが)な才女だったのだ。学校では当然人気者で、僕などそうやすやすと近づくことさえできなかったのである。だから、僕は彼女と同じ塾へ通うことにしたのだ。(中略)

僕は塾帰りに、途中の国道沿いの雑貨屋で肉饅を買って食べる習慣があつた。季節が変わり寒くなり始めると湯気の昇る肉饅を食べることが凄く楽しみになるのだ。北海道の夜空は星が高く、きらきらと散りばめるように灯っていて吸い込まれそうだった。僕は肉饅を口いっぱいにはおばりながら、その神秘的な輝きを見

つけていた。大きな星空を見ると、自分たちの存在の小ささに氣を失いそうになった。

僕らは微妙な年頃であつた。恋を知り、物事をわきまえ始める年頃であつたのだ。

「なあ、ニツク。君は誰か好きな女の子はいるのかい」

ジョンは缶コーヒーを啜りながらそういつた。

僕は思わず食べていた肉饅が喉に詰まりそうになって、一度咳払いをするのだった。

「なんだよジョン、いきなりそんなことききやがつて」

(帯広はあまり方角らしい方言がなく、殆ど標準語であつた。それから僕らの年齢の子供たちはテレビの影響もあつて、東京風の言葉を使うのがかっこいいとされていたのである。僕は直ぐに土地の言葉や習慣になれる才能を持っていたのだ。それがないと転校生は余所の土地では生き残つてはいけないからだ)

「お、顔が赤いぞ。さては図星君だな」

ジョンがそういつて僕の肩を叩くので、僕は思わず目を伏せてしまった。

「だれだよ、ニツクは誰が好きなんだ」

ロバーツが煽る。

「ひゅー、ひゅー」

サムはポケットに手をつっ込んだままマフラーに首を疎めて僕を冷やかした。(中略)

僕は夜空を見上げた。星の瞬きがキャサリンのウインクのようで胸がときめいていた。沢山の初恋を経験していたが、多分あのときの感情が僕の本当の恋の第一歩ではなかったかと思うのだ。胸がときめくということを知ったのはまず間違いない(断言はできないが)キャサリンが最初の女性であつた。

(辻仁成「キャサリンの横顔」)



「ジョンこそ、誰が好きなんだよ。ずるいぞ僕ばかり」
僕はときめきにつつまれながら、負けずにジョンにそう指摘した。
父親のお古のアイビールックに身をまとったジョンが今度は赤く
る。

「そうだ、ジョンは誰が好きなんだ」

ロバーツが煽る。
「ひゅー、ひゅー」

サムは鼻水を垂らしながら目だけ細めて今度はジョンを冷やか
した。

ジョンは星空を見上げていた。誰かのことをこつそりと思ってい
かのような恥じらった表情をしながら。

「そういう、ロバーツはどうなんだよ。君は誰が好きなんだ」

ジョンがそう応戦すると、今度はロバーツの顔が赤くなるのだ
た。

「ひゅーひゅー」

サムは相変わらずマフラーに顔を埋めて、欠けた歯の間から空気を
吐きだしている。そのたびにひゅー、ひゅーは大きくなるのだ。

僕はサムのほうへ振り返って、指摘するのだった。

「サム、（狸先生風にいえば、サーンムという感じだ）サムこそ誰
が好きなんだよ」

するとサムは顔を赤らめることもなく、いつてのけたのである。

「僕？ 僕はキャサリンさ。決まってるでしょう」

僕らはいっせいに大声をあげた。えーっ。その声が余りに大きくて
お店の人が見に来たくらいだったのだ。

「サムはキャサリンが好きなのか？」

ジョンが確認するようにそういう。

「ああ、僕はキャサリンが好きだよ」

サムは気後れすることなくそうはつきりというのだった。

「キャサリンだぞ、お前はあのキャサリンのことを好きだっていうん
だな」

ロバーツの声は心なしか上擦っていた。

「キャサリンはキャサリンさ。親父のようにキャバレーに行くわけ
じゃないから他にキャサリンなんて女は知らないよ」
サムはきっぱりというのだった。

「何時からだ」

僕は身体を震わせてそう抗議するのだった。

「前からだよ。もう忘れてしまったけどずっと前からだ」

僕たちはそれから一言も喋ることができなかった。皆キャサリンが
好きだったのだ。しかしあの頃は北海道の星空のように全てが純粹
で、僕たちはそれに従うしかなかったのである。

つまり、あの頃はまだ僕たちは幼くて恋人はいつたもの勝ちだっ
たのである。最初に好きだと公言してしまったものが恋人になりえた時
代であった。（それでは早くいえないじゃないかぐずぐずしない
で、と思われるかも知れないが、そこがうぶな青春の蹉跎なのだ）

そしてそれから暫くの間、僕たち四人の間でだけ、サムはキャサリ
ンの恋人になつてしまったのである。勿論向こうはサムのことをどう
思っていたかはわからないけれど。

僕は失恋を噛みしめながら、その後も狸先生の授業に出つづけ
た。そしてキャサリンのきりりとした横顔を切なく見つめるのであ
つた。

（辻仁成「キャサリンの横顔」）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

当時、私たち兄弟は家の二階の八畳間二つをそれぞれ勉強部屋と寝室にしていつも二人並んで暮らしていたが、机のある部屋の天井にはいつしか弟の作った模型飛行機がびっしりつるされていた。模型といつても物の乏しかったあの頃、子供の遊びやそのための玩具はすべて自前だった。

弟の作る模型飛行機はどれも完全に彼の創意で設計され、かろうじて手に入ったひごとか細い木材をさらに自分でけずって曲げながら作っていた。模型作りはその頃のはやりだったが、弟の作品は子供ながら見事なもので子供たちが手製の作品を持ち寄って競う中ではいつも出色だった。私はその種の手のかかる作業が苦手で、作品を完成したことがない。

そのせいの嫉妬ではないが、多少のいまいましもあつたらうか、ある時弟の成績がひどく下がって父が彼をしかつた折、彼よりは一応父を満足させられる成績を収めていた私が父に、弟の成績低下の最大の原因はあの模型作りで、あれをやめさせぬ限り彼の成績はおぼつかまいといいつけた。

父もうなずいて弟に模型作りを禁じ、いきなりではなかったが、それでも趣味をやめぬ弟へのみせしめにやがて、天井から外して乱暴に束ねた紙張りの飛行機を庭で火をつけて焼いてしまったことがある。その頃何ものにも替え難い手作りの模型たちは、あつけないほど簡単に燃え上がって灰になった。

その横で弟は、そんな親のせっかんを自分の料として納得しなくてはと思ひながらも諦めきれずに、目に一杯涙をため、懸命に唇をかみしめながら立ちつくしていた。

父にとつては他愛のない子供の玩具だったろうが、弟が渾身それに打ち込んできたのを間近で眺めていた私にはなんともつらい光景だった。そして、それが実は賢しげな私の讒言でもたらされたことを弟以上に私は心得ていた。父にとつては親として当然の仕

置きだったかも知れないが、私にとつてはただか学校の成績のために、弟への一番つらいせつかんを父にとりもつた自分がわかにおどましく許せぬものに感じられその段になって恥ずかしくなったが、黙つたままでいた。

私がすぐに放りだしてしまうような粗末な素材を、愛しむように神経こめながらロウソクの火にかざし、少しずつ少しずつ曲げて整え、満足そうに一人でうなずきながらまた次の作業に目を細めていた弟の姿が今でも目に浮かんでくる。

弟の作った模型飛行機について、もう一つ鮮烈な記憶がある。

父の懲罰からしばらくして、またまた独自の設計で弟は風変りなかなり大型の飛行機を作った。戦争前に長距離飛行の世界記録を作つて有名だった理研の試作機に似て、胴長で翼が長く幅広い不思議なプロポーションの飛行機だった。

家の前の道路での試験飛行では、細長い胴体にたわなに張つたゴム紐を半ばも巻かぬのに、新作機の飛び具合は絶好だった。弟は満足そうで、突然、集まつた仲間に向かってその飛行機を家の前の高い丘の頂上から風に乘せて飛ばすといひ出した。

思つても胸ときめく試みだったが、せっかく作つた飛行機がどこへ飛んでいつてしまふかわからず、尽くした努力があつてなく消えてしまいかねない。私はしたり顔で説いて止めたが弟はとりあわずに仲間を従えて丘へ上つていった。

丘の上には下で見るよりも格好の風が吹いてい、弟は長い胴体にかけたゴム紐をゆっくりと一杯に巻き上げてかざすと、風に乗せるように少し上向きに角度をつけて放つた。飛行機は身震いするようにして舞い上がり、そのまま見事に風に乗って我々のいる頂よりも高い高度を真つ直ぐ町に向かって飛んでいった。

それは予期したよりはるかに素晴らしい見ものだった。ゴム仕掛けの動力の威力は知れたものだったが、バランスのとれた大きな機体はかなりの風にもめげずうまくそれに乗って悠々と安定した

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

滑空をどこまでも続けていった。ただの模型飛行機が飛んでいくとはとても思えぬ、日頃見る、近くに多い鳶たちの滑空と同じように見事な、完全な飛翔だった。

すでにプロペラは止まっているが、一向に機首を下げぬ模型飛行機は奇跡のようになお飛び続けていった。仲間も私もただうつとりと息を凝らしながら見入っていた。そして、やがて飛行機がゆるやかに下降しだし、眼下に続く大きな松林の彼方の町並みに消えていった時、みんなは一斉に喚声を上げながらその飛行機を取り戻すために丘を駆け降りていった。

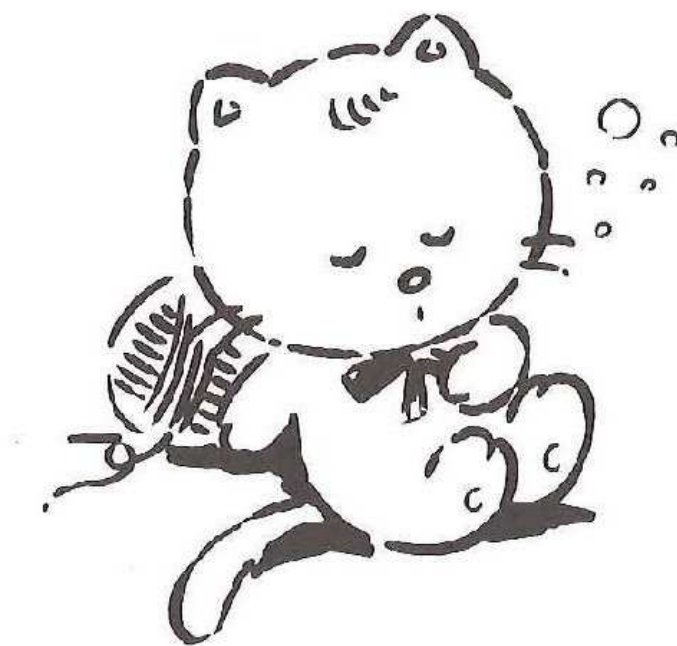
しかし、なぜか弟だけはみんなの後を追わず、私が促しても、あれはもういいのだというようにただ首を振って笑っていた。それはいかにも、あの模型とは思えぬ素晴らしい、生命をさえ感じさせる傑作を一人で作りだした男の自負と自信に満ちた表情だった。そして、彼だけが、自分の手になったあの飛行機の底力を誰よりも知っているが故にも、あの飛行機がもう誰の手も及ばぬはるか彼方まで飛び去ったことを覚っているようにみえた。

私は初めて目にする、圧倒的な存在感のある誰か大人を眺めるようにそんな弟の様子をうかがっていた。子供のくせに彼一人が泰然として浮かべている笑顔の意味が私にはどうにも解せぬものだった。強いて想えば、それは、子供たちの中にあつて一人彼だけが、ぜいたくな悦楽のために高価な代償を甘んじて受け入れることが出来る、ひどく大人びて孤高な雰囲気だった。

(石原慎太郎「弟」)



99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67



「君は、何でも食べるようになったな」
デザート^{デザート}のシャーベットを食べながら、ふと思い出したように、J
が言った。彼は、自分の前にあった皿^かだけでなく、息子たちの食べ残
しの分まで、ことごとくたいらげていた。

「あら、昔は、好き嫌^{すききら}いがあったの？」

驚^{おどろ}いたように、妻が言う。Jは、いたずらっぽく目で彼^{かれ}の方を
盗^{ぬす}み見たあと、笑いをかみこころすようにして説明する。

「好き嫌いというよりも、こいつはまったく何も食べなかつたんだ。
高校時代、昼メシを絶対食べなかつた」

「朝もだ」

と彼^{かれ}が補足した。

「あら、どうしてなの？」

「食欲^{しょくよく}というものを、軽蔑^{けいべつ}していたんだ。僕は自分を、何かしら特
別の存在^{そんざい}だと思っていた。その特別の存在^{そんざい}が、ふつうの人間とおんな
じようにメシをくうなんて、とても耐^たえられなかつた」

「でも、晩^{ばん}ごはんは食べてたんでしょ」

「一日じゅう、何も食べないでいるってわけにもいかなからね。悲
しいことだけれど、僕^{ぼく}もやつぱり、一個の生きものだから……」

横あいから、Jが口をはさんだ。

「その一日一回きりの食事^かつてのが、すごいんだよ。彼の家^{かれ}で、一度
夕食をこちそうになったことがあつてね。とにかく、こいつがメシを
くつてるのを見るのは、あれが初めてだつた」

「まあ、どんなふうだつたの？」

「おかしいんだよね。テーブルの上に、トマトケチャップの大ビン^かを
置いてね、何でもかでも、ベトベトの真ッ赤^まッ赤^かにして食べるんだ」
「何でもかでもって——」

「つまり、あらゆるものだよ。肉でも、魚でも、野菜でも、メシで
も。これは現場を見たわけじゃないけど、お母さんの話では、カレー
ライスを食べる時でも、皿^かが真ッ赤になるまでケチャップを——」

「うわッ、気持ちわるい」
彼の妻は、つわりになつたように、口を手でおさえて、むせかえ

つた。それから、息もたえだえ、といった様子で、尋ねた。
「あなたって、そんなふうだったの。でも、あたしと一緒になつた時
は、ふつうに何でも食べたじやないの」
「そうだよ——」

だしぬけに彼は、奇妙^{きみょう}に冷やかな眼射^{まなざ}しで、妻の顔を見すえた。

「お前と一緒になつた時、僕は、トマトケチャップの大ビンと、訣別^{けつべつ}
したんだ。そして、同時に僕は、トマトケチャップの大ビンに象徴^{しょうちゆう}
される何ものかに対して、別れを告げたんだった」

「なーによ、何よ」

と妻は、からむような口調で、大声をはりあげた。

「何のことだか、わけがわからないわ。大げさなこと、言わないで
よ。いったいトマトケチャップに、どんな意味があるっていうの」
＜中 略＞

「それは、こういうことなんだ」

妻にはなく、まるで自分自身に話しかけるような調子で、彼は
ゆっくりと語りはじめた。

「子供の頃、僕は現実^{げんじつ}というものを嫌悪^{けんお}していた。現実^{げんじつ}は、僕^{ぼく}をうけ
いれてはくれないし、だから、僕^{ぼく}の方も、現実^{げんじつ}にまつわる一切のものを
拒絶^{きよぜつ}してやろうと、身構えていた。食べるものにしてもそうなんだ
よ。いろんな材料^{そんざい}がありいろんな料理^{りょうり}があり、いろんな味^{あじ}つけがあ
る。それは大人たちの約束事^{やくそく}じゃないか、と僕は覆^{おほ}つた。そんなもの
は、無視^{むし}すればいい。そこで僕は、材料^{そんざい}の風味^{ふうみ}や、味^{あじ}つけが吹きとん
でしまうように、あらゆるものにトマトケチャップをかけて、口の中
に流しこんだ。ほんとうは、僕は宇宙飛行士^{うちゅうしやうし}が口にするような、
チューブに入った食べもので生きていたかった。料理^{りょうり}だとか、調味^{ちゅうみ}だ
とか、そんなくだらないものに自分の感覚^{かんかく}をひきまわされなくなつ
た。つまり僕は、数字や記号で置きかえることができるような、
抽象^{ちやうしやう}的な存在^{そんざい}でありたいと願^{ねが}っていた。それが僕の夢^{ゆめ}だつたし、そ
の夢^{ゆめ}が破れた時、僕^{ぼく}の青春^{せいしゆん}は、終わったんだ。むろんこれは、一つの
思いこみが消えて、新たな思いこみが始まつた

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

けなのかもしれない。でも、それでもいい。とにかく僕はいま、こうして、みんなとテーブルを囲み、いろんな食べ物を味わった。そう
だ、人と人が、心の底からお互いを理解し、永遠に愛しあうなんてことは、現実にはありえないかもしれない。けれども、同じ料理を口に
して、その味や風味や舌ざわりを、ともにかみしめることはできる。それは愛などといったイメージからはかけはなれたものかもしれない
ないけど、でも、これはこれで、とても大切なことだと僕は思う。自分以外の他人たちと、何かと一緒に食べるなんて、以前の僕なら、それ
れ自身が不快のタネだったんだが……。つまり、そういうことなんだ。いま僕は、トマトケチャップなしで、さまざまな料理を、みんな
とともに味わうことができる。かつては嫌悪し、拒んでいた現実をお
「おだやかに——？」

不意に、異議をはさむように、Jが遮った。しかし彼は、いちだんと強い口調で、同じ言葉をくりかえした。
「そう、おだやかにね」

そう言っただけは、テーブルを囲んでいる、妻と、二人の息子と、Jの一家三人を、撫でるようなすばやさで、ぐるりと見回した。

(三田誠広『トマトケチャップの青春』)



99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67



いもがあたえられると、サルたちは、目の色をかえてとびつき、いもをつかむと、いそいで海にもつていきます。いもについた砂をあらって食べるためです。いもを両手にもち、あとあしで立って走るサルもいます。そのために、ほかの場所にすむサルは、めったに二本あしでは歩かないのに、この島のサルたちは、立って歩くことが、とてもうまくなりました。

年よりたちは、海水にいもをつけ、手でごしごしこすって、砂をとります。ところが、母ザルたちは、海水のなかで、かるくゆするだけです。それで、じゅうぶん砂がとれます。しかも、母ザルは、ひとくちかじるたびに、いもを海水につけています。「どうしてだろう。」キヨンは、ふしぎでした。でも、海水になかに落ちているかけらを食べてみて、わけがわかりました。おかあさんは、いもに塩味をつけていたのです。

「ペペツ」キヨンは、口のなかのものを、あわててはきだししました。砂浜にまかれたむぎを食べると、砂がいつしよにはいつてきて、すぐくまずいのです。

「ばかね、こうするんだよ。」とでもいうように、おかあさんは、むぎを砂といっしょにかきあつめ、それを手でつかんで海へもつていき、水のなかになげいました。むぎについていた砂がすっかりとれ、むぎは、水中で、金のつぶのように光っています。おかあさんは、それをひろって食べました。

「ふうん、いいやりかただな。」と思って、キヨンはまわりを見ました。と、みんな、そうしているのです。「へええ、頭がいいんだな、みんな。」キヨンは、すっかり感心してしまいました。

「あれ、どうしたんだろう。」キヨンは、サンゴを見て、ふしぎに思いました。サンゴは、この群れでいちばん強いメスです。それが、むぎあらいをせず、すわったまま、きよろきよるとまわりを見まわしているのです。

ノギクが砂を手でかき、むぎを集めはじめました。サンゴは、それをじいっと見ています。ノギクがむぎを集めて手にもち、海になげられると、サンゴは、すかさず走って行って、ノギクのせなかをつきとばしました。ノギクは「キャッ」と悲鳴をあげてとびのきます。そのすきに、サンゴは、水中になげられたむぎを、よこどりしてしまったのです。ノギクは、しばらくくやしそうに見ていましたが、強いサンゴにさからう勇氣はありません。すぐすごと、また、むぎを集めました。

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

サンゴは、よこどりが専門です。「悪いやつだなあ。」と、キヨンは、あきれはててしまいました。(中略)

幸島は、海にかこまれているのに、むかしは、だれも海にはいるものはいませんでした。ある日、海に落ちたピーナツをひろうのに、子ザルが海にはいつてから、みんなが海にはいるようになったのです。でも、カミナリをはじめ、年をとったサルたちは、けっして水のなかへはいろうとしません。考えかたが古いので、新しくはじまった行動をとりたいることができないのです。新しい発見や発明するのは、ほとんど、古い習慣にとらわれない子どもたちです。子どもは、文化のつくり手です。

潮がひくと、群れは、いつせいに海岸へ行き、貝を食べます。ウノアシやヨメガカサのように、岩にびったりはりついているものは、歯ではがしとりまします。まき貝のクボガイもだいすきです。キヨンは、クボガイをひろって食べました。おいしくて、ほっぺが落ちそうです。

むかしは、貝を食べるものは、だれもいませんでした。それが、十数年まえに、はじめて、食べるものがあらわれたのです。だれがさいしよだったかは、わかっていません。でも、これも、きつと好奇心の強い、子どものサルだったのでしょう。貝を食べる行動は、しだいに群れのサルにつたわっていき、いまでは、ほとんどみんなが食べるようになりましました。新しい食習慣が、群れにできたのです。

つまり、貝食いという食物文化が、新しく生まれたのです。その後、キヨンがおとなになつてから、島の漁師がすてた魚を食べるものが出てきました。なかには、つり人がつた魚をねだるものもあらわれはじめ、つり人をこまらせています。いづれ、魚食いも、この群れの食物文化になることでしょう。世界じゅうのサルのなかで、生魚を食べる習慣をもった群れは、ほかにありませんから、この行動は、とてもめずらしがられることでしょう。

それにしても、幸島のサルたちは、いもあらい、むぎあらい、貝食い、魚食いと、つぎつぎと新しい文化を生みだしてきました。新しい行動を身につけたり、問題を解決していくちえをもっているのには、びっくりします。そして、「文化をもっているのは、人間だけではないんだなあ。」と、考えさせられます。

(河合雅雄「二ホンザル」)



66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

読解問題 10月4週分

問1 読解マラソン集1番「ある将軍^{しょうぐん}が」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 矛盾^{むじゆん}することわざは、両立^{りやうてい}しないので、どちらか一方が正しい
- B ことわざには、性善説^{せいぜんせつ}に立つものも、性悪説^{せいあくせつ}に立つものもある
- 1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集1番「ある将軍^{しょうぐん}が」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 「せんだんはふた葉よりかんばし」ということわざは、「大器晩成^{たいきばんせい}」とは反対のような意味である
- B ことわざは、矛盾^{むじゆん}しているどちらも成り立つ
- 1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集2番「人間は嗅覚^{きゅうかく}に関しては」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 食肉類^{しきりちゆう}は、肉の味覚^{あじかん}に関しては敏感^{びんかん}である
- B 霊長類^{れいちゆう}は、敵から身を守るために色覚^{しきかく}が発達した
- 1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集2番「人間は嗅覚^{きゅうかく}に関しては」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 実^{じつ}のなる植物は、サルや鳥に食べられることによって種^{たね}を遠くへ運ぶ
- B おかしのパッケージで、最近流行^{きんぱん}しているのは、青や緑色である。
- 1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集3番「私の友人^{わたし}に」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A アメリカ人は、日本人^{わたし}がみな水泳^{あお}が上手^{あお}だと思っている
- B 私^{わたし}が外人で眼^めが碧^{あお}いので、よく「碧^{あお}い眼^めの」と形容される
- 1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集3番「私の友人^{わたし}に」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 英国は耐乏生活^{たいぱく}の国なので、料理^{りよう}がまずいことが多い
- B 英国人が紳士^{しんし}だというのは、根拠^{こんきよ}のないことではない
- 1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集4番「求めよ、さらば開かれん」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 言語学者^{ひはん}のレーヴェスは、言語に可能なのは現状の報告^{ひはん}だけだと考えていたらしい
- B 動物行動学者^{ひはん}のローレンツは、動物が鳴くのは人間の言語に近いと述べて、レーヴェンスを批判した
- 1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集4番「求めよ、さらば開かれん」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 私^{わたし}は、オスネコのパンダに、ドアを開けたいときはノブにさわればよいと教えた
- B 横断歩道^{ふみきり}で手を上げるように、鉄道の踏切^{ふみきり}で手を上げて渡る人^{わた}もいる
- 1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 11月4週分

問1 読解マラソン集5番「^{おそ}恐らくまだ^{わたし}私が」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 父は、^{わたし}ふだんは、^{わたし}私等を散歩につれていくようなことはなかった
B 「父は^{わたし}私等に引っ張られて」という説明から、父が^{ぐんかん}軍艦の射的場にはあまり関心がなかったことがわかる
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集5番「^{おそ}恐らくまだ^{わたし}私が」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 「兄は^{きょうがく}驚愕のあまり……ただわくわくしながら」というのは、兄が自分が打たれなくてよかったと喜んでいる様子を表している
B 「^{わたし}私はもう^{はず}羞かしいも何も^{わす}忘れていた」というのは、^{いた}痛みや^{きょうふ}恐怖で心がいっぱいになったからである
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集6番「^{わたし}当時の私には」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A ^{わたし}私は今でも父の仕打ちに^{なっとく}納得できないものを感じている
B 父が^{もほう}模倣性を嫌ったのは、父自身の中にある^{もほう}模倣性を見るようだったからである
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集6番「^{わたし}当時の私には」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A ^{わたし}真实性を求める父の気持ちは、自分が^{なっとく}瞞されようとしているという考えに変わっていった
B ^{わたし}私は、今では、父に好かれるようにもっと自分らしく行動すべきだったと思っている
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集7番「^{わたし}元気に孫の運動会を」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A ^{わたし}私は、母が亡くなるという心の準備ができていなかった
B 母は、^{わたし}私にグチることで、夫を失った不安から立ち直っていった
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集7番「^{わたし}元気に孫の運動会を」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 「母と^{ちが}違う生き方」とは、^{むすめ}娘の言うことを素直に聞くというような生き方である
B ^{わたし}私は今でも、母に似ていると言われるが、もうそのことは気にならない
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集8番「^{ぼく}僕は一度だけ」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A ^{ぼく}僕たちが、^{かのじょ}自転車で競争するようにとばして^{じゆく}塾に通っていたのは、^{じゆく}キャサリンという女の子が好きだったからである
B ^{ぼく}僕は、^{かのじょ}彼女の横顔を見たくて^{じゆく}塾に通うようになった
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集8番「^{ぼく}僕は一度だけ」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A ^{ぼく}僕らは、^{しんび}肉饅頭の神秘的な^{かがや}輝きを見つめながら口にはおぼっていた
B 「^ふ図星君だな」と言われて僕が目^ふを伏せてしまったのは、^ふキャサリンが好きだということがわかってしまったからである
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 12月4週分

問1 読解マラソン集9番「ジョンこそ、誰が」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 僕は、ジョンの好きな相手を知りたくてたまらなかった。
B ジョンは、サムに冷やかされたことに腹を立てた。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集9番「ジョンこそ、誰が」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A サムは、何の恥じらいもなく、キャサリンが好きだと言っのけた。
B サムがキャサリンのことを好きだと聞き、他の三人はサムに敵意を抱くようになった。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集10番「当時、私たち兄弟は」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 弟は、模型飛行機を焼かてしまったことを自分の科として必死に納得しようとしていた。
B 私は、自分のせいで弟の模型飛行機が焼かてしまったことに対して自責の念にかられた。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集10番「当時、私たち兄弟は」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 私は、模型飛行機を高い丘の頂上から飛ばすという計画はうまくいくはずがないと思っていた。
B 悠々と飛び続ける飛行機を見た弟の表情は、自負と自信に満ちあふれていた。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集11番「君は、何でも食べるように」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 妻は、筆者が高校時代に夕食しか食べていなかったことを知らなかった。
B 筆者は、高校時代、できることなら夕食も食べずに済ませたいと思っていた。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集11番「君は、何でも食べるように」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 筆者は、子供のころ、現実を嫌悪することで、現実と関わろうとしていた。
B 筆者は、今でも、他人と一緒に食事をするを不快に思うことがある。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集12番「いもがあたえられると」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 母ザルたちよりも年よりたちの方が、いもを念入りに洗う。
B この島のサルたちは、いつも二本あして走っていもをあらいにいく。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集12番「いもがあたえられると」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A サンゴがむぎあらいをしないのは、あらい方を知らないためである。
B 生魚を食べるサルの群れは、世界でも幸島にしかない。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

10～12月

小1 コード：nane パ ス： PDF	小2 コード：nane パ ス： PDF	小3 コード：nane パ ス： PDF
小4 コード：nane パ ス： PDF	小5 コード：nane パ ス： PDF	小6 コード：nane パ ス： PDF
中1 コード：nane パ ス： PDF	中2 コード：nane パ ス： PDF	中3 コード：nane パ ス： PDF
高1 コード：nane パ ス： PDF	高2 コード：nane パ ス： PDF	高3 コード：nane パ ス： PDF